田辺湾神島総合調査の概要

後　藤　　伸
（和歌山県立南紀高等学校）

神島は田辺湾内に浮ぶ大小２つの小島からなる無人島で，古来神社林として保護を受けてきた。島全体が照葉樹林におおわれ，国の天然記念物に指定されている。

この島の学術的な調査は過去２回あり，今回は第３回目に当る。

第１回　南方熊楠他：植物相調査・顕著樹木所在図作製（1934）
第２回　森川国康：動物相（おもに土壌動物）
　　太田耕二郎：植物相（植物目録）（1956）
第３回　太田他10名：植物相，粘菌類，鳥類，昆虫類，クモ類，ササラダニ類，陸産貝類，顕著樹木所在図，等。

調査は1983年から３年間行われ，1987年中に報告書が印刷される予定である。したがって，ここでの報告は，その概要にふれるにとどめる。以下項目別に調査者の了解済みのものについて説明する。

1. 植生：植物社会学的に調査研究した結果タブ・ムサシアブミ群集が大部分を占有し，周縁風衝地にはウバメガシ・トベラ群集が発達している。しかし，島内にはタブノキの幼木のみが多く，林冠にまで達するものは数株にすぎない。また，ムサシアブミは分布していない。したがって，キノクニスゲ・ウラジロガシ・バクチノキなど特有の植物を含む下位単位の亜群集などが設定される。

相観的には，ホルトノキ・バクチノキ・モチノキなどの常緑樹にムクノキ・エノキ・ヤマハゼなどの落葉樹が混生する原生林である。島の周辺部には，小さい浜が２つあるだけで海浜植物群落の発達はよくない。

2. 顕著樹木所在図：昭和９年島全域を天然記念物に指定をする申請書を提出した析，南方熊楠・北島脩一郎らによって作製されたものである。その調査から約50年経過したため，今回の調査でも同じ図を作製し，比較検討することを試みた。その結果，極めて明らかな差異が見られた。①タブノキ・アキニレ・クロマツ等の大木がほとんど姿を消している。②それに反して，ホルトノキが急激に増加し，イヌマキ・ウラジロガシなども目立った存在となっている。③また，ムクノキ・エノキも増加して二次林化の要素を加えている。

森林の変遷に関してその要因をさぐると，数回の超大形台風の通過，南海道大地震，昭和30年代の松枯れ現象などがある。しかし，これら自然現象による以前に，明治末期から大正年間にかけて行われた，小規模な樹木の択伐や林床の下刈りが，その遠因となっていることも考えねばならない。

3. 野鳥：過去に調査されていない。しかしトビ・ムクドリ・ミサゴ・イソヒヨドリ・クロサギ・アビ・ウなどが年中見られ，冬にはヒヨドリ・カモメ類・ハヤブサ・ジョウビタキなどが飛来するということは，いそ釣りに訪れる人の話からわかっていた。今回の調査では，以上のものに加えて，①アオサギ・コサギ・クロサギ・ササゴイなどが，春から秋にかけて数十羽から数百羽集まる。②アジサシ類が群れをなして島周辺を徘徊し，時にはコグンカンドリも飛来する。③ササゴイは神島の林内で営巣する。④冬にはマガモなどカモ類が数十羽飛来する。

野鳥の飛来数増加の原因は，島の周辺に設置される養魚場のためである。これは春から秋にかけて，島の周辺に浮べるもので，飛来する鳥の糞で島の南面の樹木の葉が白く見えるほどである。

4. 昆虫類：森川（1956）が，かなり詳細に記録しているが，今回の調査においても，亜熱帯以南に分布する数種が発見された。

ツマアカベッコウ（ベッコウバチ科）
ウスヒラタゴキブリ（チャバネゴキブリ科）
クロゴキブリ（ゴキブリ科）
アッサムナガカメムシ（ナガカメムシ科）
ヤクシマルリシジミ（シジミチョウ科）
ナガサキアゲハ（アゲハチョウ科）

詳細は省略するが，上記のうちクロゴキブリは，室内害虫として有名な種で，日本で野外生活をするという報告はない。しかし，神島では森林の中にすみ，朽木の中で産卵し，幼虫態で越冬することも確認された。近似種にウルシゴキブリがあるが，同定の誤りではない。

関西自然保護機構業績第43号